

日本漢方協会通信

2020年 5月

前回の肺炎に使われる漢方処方の内、中国で使われている清肺排毒湯の中心処方の射干麻黄湯（金匱要略）について、
A 森田幸門先生の金匱要略入門（森田幸門漢方治療研究所）
B 東門医林会の類聚方広義解説（創元社）
の文を掲載させていただきます。
東門医林会の臨床の最後のところに「臭覚の異常」が書かれています

A 第100条 射干麻黄湯の証

（喘息のため）欬と共に呼吸困難を訴え、喉部に蛙の鳴声の如き音の聞えるときは、射干麻黄湯の本格指示である。

○ 欬して上気し、喉中に水鶏^ミの声のするときは、射干麻黄湯之を主る。

○ 本条は慢性気管枝炎、或は気管枝喘息にて肺気腫を伴うときの証治を論ずる。浅田

○ 水鶏、蛙のこと。丹波元簡は、案ずるに、水鶏は二種あり。本草蘇頌に、^ミ（蛙の古字）は即ち今の水鶏、というは是れなり。また、司馬相如の伝頰は、庸梁は一名水鶏、即ち本草に謂う所の鶉（トウ、おおくいな）なり、と注す。此に水鶏と云うは蓋し蛙をさして言う、その鳴声の連々として絶えざるを取るのみ、という。

栗園は、是は即ち肺脹の証治を論ずるものなり、下条（第106条）に肺脹は欬して上気と曰い、また欬して上気するは此を肺脹となすと曰うは以て見るべし。金鑑に、欬逆上気は欬するときは則ち気が上つて衝逆するを謂うなり、と云うは非なり。上気は即ち逆満、故に咽喉に声あつて水鶏の鳴くが如きなり、という。また巢元方の病源候論卷十三に、肺病は人をして上気し、兼ねて胸膈に痰は満ち、気行は壅滞し、喘息調わず、咽喉に声あつて水鶏の鳴くが如くならしむ、という。之等に拠るとき、欬して上気し、喉中に水鶏の声と記するは、喘息性呼吸で呼吸困難が甚しく、連続的に欬嗽の発することをいうのである。

処方第53

射干麻黄湯方

射干	3.0	麻黄	4.0	生薑	4.0
細辛	紫苑	款冬花	各3.0	五味子	2.0
大棗	2.0	半夏	2.5		

以上九味、水1200匁をもって、先ず麻黄を煮ること一二沸して、濾過しその濾液に残りの諸薬をいれ、再び煮て300匁となし、100匁一日三回温服せよ。

○ 張路玉は、小青竜方中に於て、桂心の熱、芍薬の収、甘草の緩を除いて、射干、紫苑、款冬、大棗を加え、専ら麻黄、細辛をもつて表を発し、射干、五味は気を下し、款冬、紫苑は燥を潤おし、半夏、生薑は痰を開く。四法は一方にあつまりその邪を分ち解す。大棗は脾津を運行し以て薬性を和す、といい、浅田栗園は、その紫苑、款冬花、射干を用いるものは咽喉不利を主るなり、という、

○ 活用

方函口訣に、この方は後世の所謂哮喘^ミに用う。水鶏声は哮喘の呼吸を形容するなり。射干、紫苑、款冬は肺氣を利し、麻黄、細辛、生姜の発散と、半夏の降逆、五味子の収斂、大棗の安中とを合して一方の妙用をなすこと、西洋合煉の製薬よりはるかに勝れりとす、という。

裏頁に続く →

718 十三枚は、疑うらくは三枚の誤なり。干の字は十字に似る。遂に誤りて一十の字を剩すのみ。
〔解〕

射干十三枚とあるのは、おそらくは三枚の誤りであろう。干の字は十の字に似ているし、伝写を重ねるうちやがて一と十に分れ、誤って十三枚と書かれたのであろう。

719 久しく咳止まず、或は産後喘咳し、頸項に痰歴を生じ、累累として貫珠の如き者を治す。細辛五味子を去り、射干を倍し、皂角子を加えて効あり。南呂丸を兼用す。

痰歴 累累。首のリンパ腺腫。貫珠 数珠。皂角子 珣トウサイカチの成熟種子。解毒、潤和薬として大便秘結、皮膚疾患に用いる。

〔解〕 久しく咳が続いたり、あるいは産後の喘咳で頸の周りに累累が数珠のように連なっているものを治すが、その際、細辛五味子を去って射干を倍加し、皂角子を加えるとよく効く。南呂丸を兼用してよい。

720 水鶏の声なる者は、痰と氣と相触るるの聲、喉中に在り、連連として絶えざるを謂う。蘇頌曰く、龍は即ち今の水鶏、是なり。陶弘景曰く、龍は蝦蟇と一類。小形にして善く鳴く者を龍と為すと。

蘇頌 宋の「図經本草」の著者。龍 青蛙。雨蛙。漢音「ガイ」。慣用「ア」。蝦蟇 蛙がま。ひき蛙。

〔解〕 水鶏の声というものは、痰と息が触れ合う音で、のどでいつまでも続くのをいうのである。蘇頌は、龍といまの水鶏のことであると。神農本草経で、陶弘景は龍とはひき蛙の類であり、小形でよく鳴くものを龍という。

二二五 射干麻黄湯⁷¹⁹

射干十三枚⁷¹⁹ 一作には三両 (三分) 麻黄、生姜各四両 (四分) 細辛、紫菀、款冬花各三両 (三分) 五味子半升 (五分) 大棗七枚 (二分) 半夏半升 (六分)

右九味。水一斗二升を以て、先ず麻黄を煮て一兩沸し、上沫を去り、諸薬を内れ、煮て三升を取り、分温三服す。水二合四勺を以て、煮て六勺を取る。

射干 二アヤメ科ヒオウギの根茎を乾燥したもの。消炎、鎮咳、祛痰剤。紫菀 二キク科シオンの根および根茎を乾燥したもの。鎮咳、祛痰、利尿剤。款冬花 二キク科フキタンポポの花蕾を乾燥したもの。鎮咳、祛痰剤 (薬効は紫菀に似る)。フキの花蕾を代用してもよい。

〔解〕 射干十三枚これは三両としてあるものもある (三分) 麻黄、生姜各四両 (四分) 細辛、紫菀、款冬花各三両 (三分) 五味子半升 (五分) 大棗七枚 (二分) 半夏半升 (六分)

右九味のうち、水一斗二升に、先に麻黄を入れて煎じ二沸せしめ、表面の泡やあくを除き、他の薬味をその中に入れ、三升ほどに煎じつめて、かすを濾し去り、三回に分けて温かいものを服用する。水二合四勺を用いて、薬味を煎じ、六勺に煎じつめて取る。

○効して上氣し、喉中水鶏の声⁷²⁰あるは、(射干麻黄湯これを主る。)

水鶏 蛙の一種。一説には河鹿とあるが、『本草綱目』に「蝦蟇に似た青綠色のもので、嘴が尖って腹が細い、俗に青蛙という」とある。上氣 二ここで呼吸困難のこと。

〔解〕 咳をして呼吸困難があり、気管上部からのどの辺りにかけてゼロゼロと河鹿が鳴くような声ができるものは、本方の主治するものである。

〔備考〕

水鶏は前記のように『本草綱目』では「青綠色で、嘴が尖って腹が細い」とあるが、日本の河川でみられる河鹿は『本草綱目』の記載のものと形態はよく似ているが、色は赤褐色であり、声は美しくコロコロと鳴く。しかし喘息や気管支炎などの患者などは、痰が上胸部辺りからのどにかけてつまり、ゼロゼロと音がして息ぜわしく、大変に苦しむ。コロコロというような美しい音ではない。だからここにいう水鶏は、日本の河鹿とは違った、鳴き声の美しくない別種の蛙なのであろう。

本方の病位は少陽の準位で虚実間である。本方は、脈が浮弱、あるいは沈数などで、舌は湿潤していることが多いが、時に乾燥していることがあり、舌苔は微白苔、腹部は微満してやや軟、あるいは陥没状を呈することがあり、頭痛や頭重があつて、咳嗽、呼吸困難、気管の上部から喉中にかけてゼロゼロと喘鳴し、喀痰は多くは稀薄でやや多量、時に血糸または小喀血のみられる、次のようなものに用いられる。

- ・ 気管支炎、肺気腫、気管支喘息、百日咳、喉頭ジフテリア。
- ・ 咳の激しいもので、犬の遠吠えのようなもの、あるいはゼロゼロという音を伴うもの。
- また、頸部瘰癧、嗅覚の異常または麻痺に効くことがある。